

カムイ伝 赤影青影

橋 てつと

カムイと呼ばれると闇に浮かんだ目が発した「お前の命を守る為に」。別の方から「精神を守る為に」。誰ゾと問う間も無く眠りに引きずり込んだのは安定剤だ、恐らく。三つ口の病魔に憑かれて妻の命は尽きようとしていた。焦りが何度も車事故を引き寄せては「待て」の声に救われる。事故後だと「待っておれば」。カムイと呼びかける二つの影に自分も名づける。「待て」が赤影、もう一方を青影。

傑作だゾ、俺はヤツパ天才だナと脱稿を渡す度にバカねと弛めていた口許を閉じ、新作『ジュリエット』を読み終える力も尽き、抜け殻を残して妻が逝ったのは早春。金魚が吐き続ける同じ泡、寂しくなりましたね、に否と返す冷血漢にはなりきれず、ゴ金魚様達のゴ憐憫に落ち込まされは草取りさえ憚られ、市民運動からも引き籠った。声かけてきたは青影だ「呑み過ぎるな、壊すぞ」「何だ」「精神よ」「守ると言った」「確かに。だが守れない時は抹殺するのも役目だ」「その時は命を守る赤影がアンタと戦う」「どうかな」。シノビ笑いで青影が去る。投げられた手裏剣の

如くに時が飛び、退職後に妻と楽しむつもりだったキャンピングカーで沖縄航路に乗船したのはサシバも南に渡る秋。デッキに立って暗い海に迂闊さを教えられる。偽名で乗船していたら知られる事なく黒潮の藻屑と消えられたのにと。車検証呈示の為だ、と悔恨と諦念が渦となった時、待ての声に振り返り、煙突辺りに赤影のスクーフを見る。

翌朝に嗟^{けしか}けてきたのは青影だ「持っているのだから、会いたい本心を。行けよ」。中途下船した島には愛人がいた。単身赴任で勤めた高校に非常勤で来た三十歳下の女、島の娘と言う語が似合う純心なコだった。呑んでいた夜に愛人は汚したくなかったから。転任で別れ四年前に連絡を絶つた、病妻への仁義だった。後に父親から出産を報される、母子とも無事と。十年ぶりの家で、姉が愛想良く教えてくれた。一月前に二人目を産みましてね、父も認めて入籍したばかりなんですよ。その夜、船に乗る。逃げ出す思いだったが、それでいいと聞こえたは青影か。「二十年ぶりですか。ミンナが喜びますよ」とパーサーに声をかけられると担任した瀧だった。おシノビなんだと答えたが届いた風でもなく、下船した途端に瀧から聞いたと携帯がきた。会いたくない方に属する男、徹だった、退学させたヤツだったから。だが迎えに来た彼に強く家に誘われる。子供を訊くと「できなかつた、若い時のヤンチャのセイだ」と答え

た後で「ヤメる俺に先生が呉れた、これだけは棄てなかつたよ」と持ち出したのは古びた人権漫画だった。当人達には言うべくもないが「非行」生徒の擁護の位置に立ってきただ。何日でも泊まれよという家を朝に抜け出す。力及ばずして退学処分から守れなかった男に甘えるなぞ恥じ入る。

新婚時代を過ごした家は壊され、荒地となっていた。幼子三人を遊ばせた磯辺に立つと怒涛となつて思い出が押し寄せた。ナマコを踏んで泣き出した子を妻と笑いあつた事、子のウンチを笑顔の妻が洗つた事、幼子が浜鍋に砂を入れて慌てた妻の顔など。怒涛が後悔のうねりへと変わつて訪島を廻り始めた時「ここだと思つた先生、徹のラインで指名手配並みよ」と教え子に声をかけられ、その後も目立つ車は追っかけの的となる。葬儀に飛行機で来た友人、袴も知る所となり、ウチに泊まらないと付き合いをやめるゾと脅され、彼の家で昔の保護者や友人達と連夜の宴となつた。女は四夜目に来た。生徒の妹で父親の命で酌に来てくれたいた頃中学生だった。デ戻りで再婚が決まったばかりなのと言ひ、酒と煙草を口にしていた妖艶な女が別れしな、抱きついてきた、島に居たらいいのよ先生、と。涙の女を離しながら幸せになるんだよ、その言葉しかなかつた。

昼前、紫煙で目覚める。疑問を宿酔の頭で解く間も無く掛け布団が捲られ煙草の香りをつけた舌が唇をこじ開けてきた。柔肌に酔ひ、目覚めた時一人だった。吸殻も無かつ

た。夜の船で帰ると決める。出港迄徹が仲間と歓送迎会をしてくれた。子供の事を聞いて悪かつたなと妻との別れを話すと「そうだったのか」「まかせろ先生。トビツキリの女を見つけて送つてやるチバ」と肩を叩いてきた。「投げなヨ、人生は長い」とのウイソクに、学校を去る彼に送つた言葉だと思ひ出す。見送りを固辞した港には一人の女が待つていた。「聞いたわ先生、氣を落とさないでね」と励ました女は授業こそ無かつたがカウンセリングで付き合つた生徒だった。半年前に再婚して一挙に五人の子持ちになつたという女に酒が軽口を叩かせた「来るのが半年遅かつた」。女が笑つた「体力残つてる？ 先生。女盛りなのよ、教え子達は」。体力氣力だヨオ、チバレよの大声に見送られて二等客室へ戻ると、瀧が一等個室に遷してくれ、「これしきで、成長と褒めて貰えますかね」と笑つた。

朝方、持つてきてくれたコーヒーを手にデッキに立つと佐多岬が見えた。妻と民宿を営むつもりで買った古民家の建つ港町、そこをエンゼルシャワーが照射した時、戻つてきたゾと口を突いて出た。二人で始めようなと続けた時、カム、と届けた声は？ 赤いスカーフ続けて青いのが空を舞ひ、待つておれ持つておれ、の声と共に波に消えたようだ。が、変わり身いや空蟬かも知れない、空服を脱ぎ捨てる術。どっちでもいい、携帯を取り出す。反原発集会への参加を伝えよう。通話可能を報せるアンテナが立つた。